

# 救援・復興県民会議だより

〈発行〉東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議 No.18 (13・8・28)

〒020-0015

盛岡市本町通2-1-36

浅沼ビル6F

電話・FAX(兼)

019-601-5133

メールアドレス

fukkou\_ikg@hyper.ocn.ne.jp

## 宮古市で開催

### 岩手県民会議第3回総会・「講演とリレートーク」(その1)

～ 総会后、復興宮古・下閉伊住民会議(準)結成祝賀会も ～



#### 「実り多い集いとなることを期待」東代表世話人が主催者挨拶 開会挨拶は、長門孝則氏(復興宮古下閉伊住民会議準備会)

8月17日、宮古市内の陸中ビルにおいて東日本大震災津波・救援復興岩手県民会議の第3回総会が、地元をはじめ県内から120名の参加で開催されました。開会挨拶は、第3回総会に向けて準備会を立ち上げた復興宮古下閉伊住民会議準備会を代表して長門孝則氏(宮古9条の会代表、宮古市議)が歓迎を含めて挨拶しました。「講演とリレートーク」に先立ち、東幹夫代表世話人が復興県民会議を代表して主催者挨拶をしました。

東代表世話人は、県民会議が総会開催に向け宮古のみなさんにご尽力頂いたことにお礼を述べ、「いわて復興一揆」の第1年度目の取り組みを意思統一する大事な総会であることを強調し、「希望を与え、実り多い集いとなることを期待する」と述べました。

#### 講演(佐藤氏)とリレートーク(4氏)



講師 佐藤日出海(はとう ひでみ)氏(宮古市産業振興部長)

東代表世話人の主催者挨拶後、「講演とリレートーク」に移り、最初に佐藤日出海宮古市産業振興部長が講演を行いました。

「3月11日はちょうど市議会開会中だった、午後3時18分に津波が防潮堤を超えた」市全体の被災状況について「市内の海側地域はすべてが浸水地域に、死者420名、行方不明96名、建物の全・半壊4005、被害総額1954億円」と話しました。当初の講演テーマから、今感じている「復旧・復興からどう発展・成長をめざしていくか」をパワーポイントを使って講演を進めました。

宮古市は、田老町、新里村、そして川井村と合併し面積の広さでは東北2位、全国8位に。本州の最東端のまち、本州4端サミット(大間町、下関市、串本町、宮古市)を行っている、東日本大震災後、「陸中海岸国立公園」から「三陸復興国立公園」(八戸市含む)へと名称変更したが観光のまち。水産業の水揚げ量は平成24年は17位(大船渡は14位)、サケ、サンマ、イカ、マダラ、毛ガニ、キンキなどと宮古市を紹介。

阪神・淡路大震災とは、被災地域が広範囲、被災状況が個々に異なることで復興のスピードも違う。これを一律にやってもらっては困る。同時に復興状況は他市町よりも進んでいる。しかし、復興しても8割程度にとどまるのではという厳しい問題、人口減などを抱えている。

福島原発から400\*。地点のまちとはいえ風評問題ある、水産加工の従事者は高齢者でしかも9月12月という雇用期間、がれき処理は来年4月で終わるが雇用されたい人の次の雇用問題、いわゆる復興特需がなくなったときに、どんな産業でやっていくのか、と当面する課題を、また、将来的に道路網整備で仙台まで3時間、八戸まで2時間、そして盛岡まで1時間半と移動時間は短くなる、これを生かすため、新たな雇用増（今の企業の規模拡大、異分野への進出）を、山本市長のスローガンでもある「安定した仕事をもって、安心して暮らせるまち」づくりをめざしと語りました。市の産業振興の方向を、食・観光・海・木材・ものづくりとし、いろいろな可能性を求めて取り組むことが必要だと強調しました。



#### 開港400周年（H27）、「学ぶ防災のまち」

佐藤部長は、平成27年が宮古港開港400周年、シー（海）グルメ大会の誘致をめざしていること、市観光協会は防災ガイドとして4人を雇用、田老町の「たろう観光ホテル」（犠牲者が一人もださなかったので壊さずに残す方向）を使って、防災を学ぶ場としたいと話す。「昨年4月からはじめたとりくみで18,982人が訪れている、今年も少しづつ増えており、6月は1か月で4千人が来た。広島原爆資料館は平和教育の場でもあると思っているが、田老を防災教育の場にしていきたい」と。最後に、「元に戻すだけではだめ、常に新しいものをめざしていかなければならないと思う」と話しました。

会場から、発展・成長をめざす具体的なものは何かという質問に、「これからの人材確保や育成には時間がかかる。しかし、そんなに時間をかけるわけにはいかない。行政としては民間事業者への補助が基本。漁業関係でも新たな目ができている。新たな環境を生かしていくという意気込みが必要だ」と答えました。



葛さん、小林さん、舘洞さん、林本さん4氏によるリレートーク

佐藤氏の講演に続き、4氏によるリレートークに移りました。

#### あれから3年目、住民に寄り添う活動が続く

最初は葛裕史さん（宮古市社会福祉協議会事務局長）。大震災直後、ボランティアの受け入れを始めたが、「最初に参加をしてくれたのは春休み中の高校生だった」と話しました。泥上げ、後片付けとボランティア活動がすすむと、「避難所における手伝い、仮設住宅でのお手伝いへと活動内容が変わっていった」。当初の想定は仮設暮らし2年、3年目には新たな住まいへと、そのような例にならなかった取り組みで、2年目は支援員による巡回活動、仮設住宅自治会の見守りや手伝いをしている。

ところが、公営住宅の建設が一番早く今年度末、入居は来年度以降。想定外だった3年目へ。「前に向けて進みましょうという声かけができない」、「次の準備をしましょう」と話すと、「この状況では、今の生活を考えるので精一杯だよ」との返答。今年1年は住民に寄り添っての活動が続いていると。最後に、8月の豪雨災害でたいへん地域に、職員4名を応援派遣していると話しました。

#### 震災直後の座談会、「ワカメ・コンブ漁からと始めよう」と、津波の後にTPP参加は困る

2人目は、小林昭榮さん（田老町漁協組合長）小林さんは昨年の総会に続いて2回目。大震災から1ヶ月も立たない、4月8日いち早く組合員との座談会をもつ。組合員もたくさんの犠牲者を出し、残った船は81隻（震災前953隻）で「どうやってやるの」という厳しい声が出された。結果として、漁師だから立ち向かおうとしないと支援が遅れる、養殖ワカメと養殖コンブをつくることから始めようとなった。小林さんは「10年近いワカメが海の中で団子状になっていて、カラン・コロンと音を立てているのを聞くとやるせない気持ちとなった」と被災直後の状況を語りました。

アワビやウニの生産も多い、重茂漁協がアワビ漁では日本・県内で一番。サケの孵化施設はかる

うじて残ったが、他の施設は壊された。アワビのセンターは今年の秋に建設、アワビの放流は再来年からできるが、あと5年がかかってこれまでの生産を回復できるか、田老にとってはアワビ生産は非常に大切だ。サケの孵化も増やしていきたい。

課題は多く、国の予算は5年続くだろうと思っていたが国と県の予算はない、少ないと言われた。原発事故や最終処理施設などの影響についても克服しなければならない。TPP参加でワカメが93%減産、コンブは70%減産なするという試算が出された、サケも影響する、TPP参加は困る、参加するなと国に要請をしたが、津波の後に参加問題で復旧できそうもないということにならないか心配だと話しました。団結してがんばろうと漁協のリーダーとして、六次化の取り組みにも自立できるような力をつけたいと決意を述べました。

### 「1日も早く、とにかく早く家を建てれる場所を教えてもらえば、年寄りなんぼでも元気がでる」

3人目は、**舘洞實さん**（**鵜が崎児童遊園仮設住宅会長**）。「20世帯という床規模の仮設住宅自治会、俺が一言しゃべればいうことを聞いてくれる。苦情はない楽しいことばかりで、みんなに話すことはない」と話すと、会場から拍手と笑いが。

「いつ、家を建てるにいいんだべ」、日程は決まったようだけでも、「明日、明日にもおらたち70、80にもなるが、死なないうちに家を建てたい」とあつまれば、しゃべっている。一日も早く、とにかく家を建てたい場所を教えてください、なんぼでも年寄りは元気がでる。「あと何年だ、何年だと言われれば、希望がなくなって、鵜が崎に住もうと人がいなくなってしまう」舘洞さんは、最後に、宮古の始まりは鵜が崎といわれる、そこから大きくなっていった、港町の活気がでることが必要だと強調しました。

### 「様々な心配はつきないが、何とか希望をもって、前向きにやっていきたい」

最後に登壇をしたのは、**林本卓男さん**（**グリーンピア田老大平自治会長**）。（旧グリーンピア田老は、「グリーンピア三陸みやこ」に名称変更）。2011年6月から仮設住宅に入居している。田老町は2011年3月1日時点で、1593世帯4434人、今年3月では1371世帯（-222）、3553人（-881）です。2年後の予測では1128世帯、2876人へと。旧田老には33の行政区があり、31自治会が存在していた

が、現在は12の行政区が消滅、11自治会が解散となっている。2011年8月頃までに、町内の3カ所に仮設住宅団地が建設され、472世帯が入居した。仮設住宅団地に8行政区がつくられ、市から自治会設置に向けた働きかけがあり努力をしたが、1つの行政区にしか自治会がつくられなかった。自治会がないところではどうやって連絡をとっているのか心配だ。私がいる仮設住宅はかつての顔見知りが多かったので自治会（37世帯で構成）をつくることができた。この間、10世帯が引っ越した。

「新しい住まいがほしいねえ」という。285世帯が高台に家を建てたいという希望をもっている。もとの市街地に住みたい（かさ上げで、危険地帯でなくなる）は90世帯が希望している。

グリーンピアには、衣・食・住のための店が、20店舗ぐらいいある（3棟の中に）。集会所、談話室は市社協が管理している。「田老サポートセンター」（シンガポールからの義援金）にお年寄りたちが集まって利用をしている

「中には大きな悩みを抱えているが、あせらずに待とう」「仮設店舗の方々はやはり悩んでいる」

当初は、仮設住宅の間取りが狭いということで体調を崩される方も出た。私も含めやっと狭さに慣れてきて、あせらずに待とう、3年間待とうという気持ちに。中には、大きな悩みを抱えている人がいる。

いつも買い物をしている仮設店舗の方々は、やはり悩んでいて、ゆくゆくは本格的な店にしたい。市街地の工事が始まるが、街並みができるまでは仮設店舗で営業をすることになるだろうが、仮設住宅からどんどん新しい住まいへ移っていく、入居者の絶対数が少なくなっていくので、商店の方々の悩みが大きくなる。「田老ちゃんハウスの借りられる期間がどれくらいになるのか」「サポートセンターはいつまでここにあるのだろうかねえ」という話がでている。「支援員の皆さんがいつまで私たちのお世話をやってくれるのか」という様々な心配が尽きない様子だ。

最後に、林本さんは、「そうであっても何とか希望をもって前向きに、これからもがんばるという言葉は好きではないが、前向きにやっていきたい。これまで頂いた大きなご支援に感謝を申し上げて終わります」と話しました。

以上、「講演とリレートーク」の紹介とします。  
（文責は、すべて事務局にあります）